

6 ニホンナシ‘王秋’の高品質果実生産のための栽培管理技術

【要約】ニホンナシ‘王秋’は本摘果の時期が満開 55 日後になっても十分に高品質な果実生産が可能である。また、着果番果は3～5番果が利用に適しており、着果させる枝は1～2年生枝より3～5年生枝が望ましい。

農業技術振興センター・花・果樹研究部・果樹係

【実施期間】平成26年度～平成30年度

【部会】農産

【分野】戦略的な生産振興

【予算区分】県単

【成果分類】指導

【背景・ねらい】

晩生の赤ナシ‘王秋’は大玉で食味が優れるとともに豊産性であるため生産現場への普及が期待できるが、本県の主要品種である‘幸水’や‘豊水’とは収穫時期や果形、収量性など品種特性が大きく異なる。そこで、高品質果実生産のための栽培管理技術を明らかにする。

【成果の内容・特徴】

- ① 満開後55日に本摘果をしても、満開後25日に本摘果をした場合と比べ果実品質に差はない(表1)。
- ② 着果番果が6番果になるほど果実は小さく、果形が縦長になる傾向がある。2番果は果実が大きくなるものの収穫前落果がやや多い。着果番果による糖度の差はない(表2)。
- ③ 着果させる結果枝の年生は、2年生枝で3～5年生枝よりも果実重が軽く、1年生枝では3年生枝に比べ糖度が低下する。3年生枝から5年生枝の間では、果実重、糖度とも差は小さい(表3)。

【成果の活用面・留意点】

- ① ‘王秋’はコルク状果肉障害(図1)の発生が見られるが、果実品質や気象条件、栽培管理との関連性は明らかにはならなかった。なお、着果番果や結果枝の年生の違いによるコルク状果肉障害の発生程度に差は認められない。
- ② 6年生枝以上の枝に着果させた場合の果実品質は不明である。
- ③ 10月中旬頃から収穫できる‘王秋’は、他品種との組み合わせの中で摘果作業や収穫作業の労力分散を図ることができ、導入により規模拡大に寄与できる。

[具体的データ]

表1 摘果時期と‘王秋’の果実品質(2018年)

摘果時期	果実重 (g)	糖度 (Brix%)
満開後25日	634 a ^z	11.5 a
満開後40日	654 a	11.7 b
満開後55日	663 a	11.6 ab

z: Tukeyの多重検定により異符号間で5%水準で有意差あり

糖度は各区50果、果実重は全収穫果の平均

満開期は4月5日、予備摘果は満開後25日に実施

表2 利用した番果と‘王秋’の果実品質(2018年)

番果	調査 個数	落果率 (%)	果実重 (g)	糖度 (Brix%)	縦横比 ^z
2番果	32	17.9	563 a ^y	12.5	1.05 a
3番果	36	10.0	535 a	12.6	1.06 a
4番果	37	7.5	537 a	12.5	1.07 ab
5番果	38	2.6	498 ab	12.5	1.09 ab
6番果	36	7.7	460 b	12.5	1.11 b

z: 縦横比: 果実の縦の長さ/横の果径(2箇所平均)

y: Tukeyの多重検定により異符号間に5%水準で有意差あり

表3 利用した結果枝の年生と‘王秋’の果実品質(2018年)

結果の年生	調査 ^z 個数	果実重 (g)	糖度 (Brix%)
1年枝 ^y	40	516 ab ^x	11.9 b
2年枝	55	501 a	12.1 ab
3年枝	57	542 b	12.2 a
4年枝	52	545 b	12.0 ab
5年枝	58	549 b	12.0 ab

z: 調査個数は果実重のみ、糖度には各40個を供試した

y: 1年枝は長果枝にあたる

x: Tukeyの多重検定により異符号間で有意差あり



図1 コルク状果肉障害(横断面)

[その他]

・研究課題名

大課題名：戦略的な農畜水産物の生産振興に関する研究

中課題名：野菜等園芸作物や近江の茶の生産振興

小課題名：ブドウ、ナシ新品種の安定栽培技術開発

・研究担当者名：小嶋俊英(H27～H30)、山中英(H27～H30)、鈴木悟(H26)、今村昇(H26)

・その他特記事項：なし